肉体の復権、生の讃歌、五感に訴えるダンス。

DIOS/DANCE COMPANY

DANCER

ジャズダンズという言葉から、フツーの人ならカラフルなレオタードを着て、飛んだり跳ねたりして踊るアレか、といったエアロビクスと混同した印象を持っている人が依然として多い。ダンスの中でも比較的歴史の浅い観のあるジャズダンスだが、実際にプロとして活躍しているダンサーたちはクラシックバレエやモダンバレエを基本にし、それをジャズやポップスなどの新しい音楽に合わせて踊るのだから、一見軽そうに見えて、実は奥が深いのである。

京都を拠点に、先鋭的な振り付けで数々のダンス作品を発表し、活躍を続けているダンサー兼演出家で渡辺タカシ氏がおられる。自らのダンス学校・渡辺ステージジャズセンターを市内に開校し、将来は世界にも通用できる若手ダンサーたちの育成に励んでいるが、氏は二年前、自らの舞踏世界を表現するためのダンスユニット・DIOSを永年ダンス教室で教鞭をとっている女生徒5人――江波未有、志形郷美、深海愛、田辺レイ、改ベラを集めて結成。結成間もない'91年、北京に新しく出来た中日青年交流センターのこけら落とし公演にも招かれるなど、目覚ましい活躍を展開している。

今回取材でおじゃましたのは、昨年の12月8日、京都府民ホールアルティにおいて、DIOSでの7回目のステージを目前に控えた、控え室の片隅であった。メンバー全員は、ステージ用のメイクアップで並び、約1時間半後に迫る本番を前に、いささか緊張しながら答えてくれた。

各メンバー、ダンスを始めたのが十代～二十代全般。「ただ踊りたかったから」、「ダンスを通じて何か表現したかった」と動機は様々であったが、基本的には5人に共通していることは、「人前で踊るのが好き」という点だった。

「普段買物している時でも、台所にいる時でも、日常生活でダンスが頭から離れたことはありませんね」と、メンバーの一人である江波さん。彼女たちは、まるで踊るために生まれてきた人間のようだ。

渡辺タカシ氏の振り付けは、ジャズダンスの中にあっては異色だ。派手なジャンプ、アクロバティックなフォームも、凝った舞台美術や衣装も無い。ダンサーたちはステージを徘徊し、うごめき、旋回し、時にはじっと静止したりと、非常に動きがゆるやかであるかと思えば、突然肉体のエネルギーがほとばしる、といった具合だ。見ようによって、そこには能や日本舞踊に通じるものがある。

「それまで西洋の伝統的なダンスを学んでいた先生(渡辺氏)がジャズダンス留学から帰国した後、欧米人に比べて手足が短い日本人の体形や仕草に合ったジャズダンスをめざすようになったので、私たちのステージを初めて観る方は思っているジャズダンスのイメージが違うので驚くかもしれませんね」と、田辺さん。彼女たちが踊るジャズダンスは、いうなれば国産製ジャズダンスということなのだ。

国産製ジャズダンスとなれば、音楽の方も変わるのだろうか、とうかがってみたところ、「BGMはクラシック、ジャズ、邦楽…何でも使います。時には先生自ら作曲なさることもあります。ジャズには普通、ビートがあって、メロディがあるという感じですが、邦楽にも洋楽と違う独特なビートがある。それにうまくノッていけば、後は楽に踊れるんです。」と、志形さんが語ってくれた。

「一時は日本的な音楽ばかり使っていたことがありましたが、今は何を流しても踊れます」と、深海さん。彼女が言うには、舞台美術や衣装に凝らないのも「ダンサーの肉体や存在感をより際立たせるため」だそう。

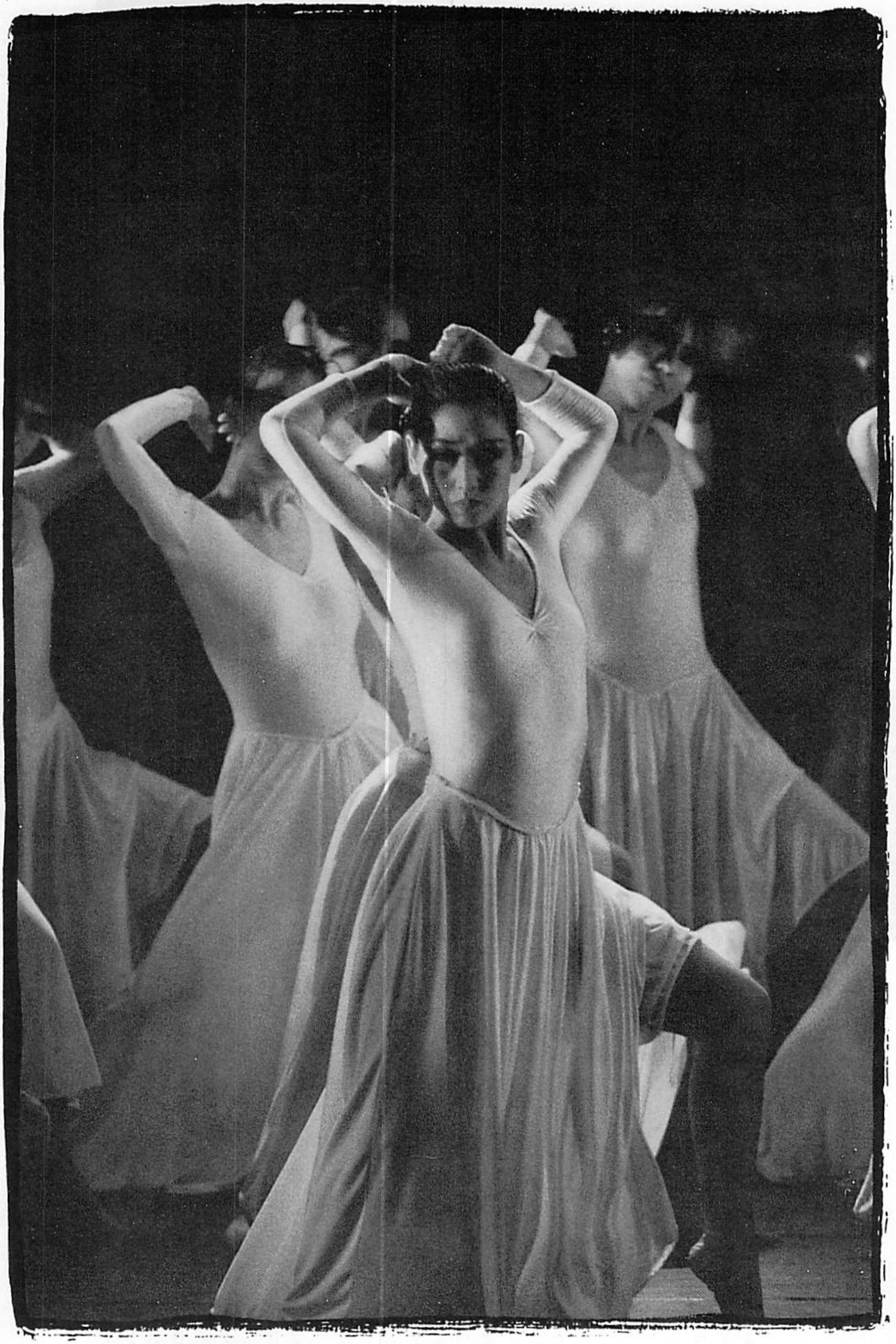
こうして聞いていると、DIOSは渡辺タカシという優れた演出家があってこそ、その力が発揮できるといった具合だ。実際一つの作品をステージで開花させるために練習を重ねていくプロセスは、「先生とDIOSの完全なコラボレーション」と、改ベラは語る。

各メンバーが一番望むことは何かと訊ねたら、一同「舞台だけでやっていけたら最高」と、答えた。日本には舞台芸術(特にダンス)を身近に観賞する伝統や場が希少なため、まだまだダンスは一部のファンの占有物になっている。しかし、輸入物でないバレエやジャズダンスが今後も誕生していけば、欧米並みにダンスも浸透するかもしれない――そんな気がした。

ライター／今江ユリ

渡辺タカシの舞踏世界を体現する、五つの個性がステージで開花。

DIOS（ディオス）

BORN in 1990

1990年、渡辺タカシ(渡辺　ステージジャズセンター主宰)のプロデュースの下、結成された気鋭のジャズダンス・ユニット。メンバーは江波未有、志形郷美、深海愛、田辺レイ、改ベラら5名。ジャズダンスのピートニックな躍動美、バレエの華麗な様式美、モダンダンスの自由な造形美などを混合し、新しいダンス作品の創造を指向する。現在、国内外各地で精力的な活動を展開中。